

# 往還二回向との値遇

本 多 弘 之

## 一 値遇としての回向

祖師親鸞は、往還二回向に値遇することによって、初めて曠劫の流転の闇を超出しえた。往還の回向をえて、信の一念に四暴流を超越しえたのである。弥陀の弘誓が往還の回向として表現せられてあることによって、一切の自力分別の彼岸としての涅槃を、定散心の果てに夢見る必要のない立場、すなわち正定聚不退の信念を確立しえたのである。和讃にいわく、

往相還相の回向に

もうあわぬ身となりにせば

流転輪回もきわもなし

苦海の沈淪いかがせん（真宗聖典五〇四頁）

無始流転の苦をすてて

無上涅槃を期すること

如来二種の回向の

恩徳まことに謝しがたし（同右）

と。この二種の回向とは、弥陀の回向成就の二相であり、この二相によって成就せられたる我らの現実を、本願の信心として自覚するところに、自力心の妄想する自利利他の作心を破って、本願力成就による実存的落在が成立する。我らの獲得する行信は、往還二回向の恵みである。

弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ

心行ともにえしむなれ（真宗聖典四九二頁）

されば、我らに獲得せられたる心行において、本願力回向の二相としての往相還相は、その方向性を回向の内なる二相として、何らかの意味で我らの行信の中に、止めているに相違ない。しかるに、行信は我らの上に獲得せられたるかぎり、法性の常樂に対する因位である。凡愚に領受せられたる本願力は、往相の方向をもって、現在の一念に迷情を突破して涅槃の真因たるの用らきを現成する。往相回向として表現せる本願の用は、大悲無倦の現行を、暗愚なる我らの日常生活の内に表現する。無明海に漂没せる我らに対して、本願力は外縁たる光明・名号となつて、興法の内因たる信心を与え励まして、報土の真身への道程を現成する。

その信心は我らにおいて発起するけれども、その根拠は我らの惑業苦の因果に内在するものではない。曠劫以来の無明海に沈淪する存在に、無明性を碎破する根拠はない。我らに獲得せられうる信心は、理知分別の合理的思惟の成果ではない。人間理性の根拠そのものに、無明の闇が潜んでいるからである。むしろ、理性とは大涅槃からの光明の照射を背にしなから、闇中を模索する努力意識なのではなからうか。

合理性を追求して存在の自性を明るみにもたらさんとする人間理性の根源に、惑業苦を背負つて生きる身心がある。

理性の解釈に先だつ人間存在そのものがある。六道流転を感受している迷妄の意識がある。人間理性の傲慢なる自己主張の底辺に、妄情を懐いて傷つきながら、忍従している存在そのものがある。

そのゆえに、「流転輪回もきわもなし」との悲しみの中に、光明の智慧は新しき不可思議の因を誕生せしめんとする。「一如宝海よりかたちをあらわし」て根源的なる願心をもって、流転の衆生の苦悩の根本を抜かんとする。願そのものが、いわば光明海を故郷としつつ、黒闇を自己の課題として流浪せんとするのである。涅槃への方向と涅槃からの方向とは、願心の内に統一せられつつ、一切群生海を場とするとき、その分野を明白にして分立する。往還二相の方向は、人間理性に内在的に意識せられる二方向ではない。往還ともに、如来願心が自己を成就せんがために、衆生を場として展開する回向の二相である。

往相として表現する如来の本願の究極は、第十一願であろう。「必至滅度」として、究竟の果を必定とする願心に、往相の究竟的理念は收斂する。その必至滅度を、我らの苦悩の因果を超えて成就せんがために、その方法論を求める思惟が、第十七願に結実したのである。諸仏称名は、仏々相念による果上の諸仏の静かなるうなずきを得て、衆生の行として表現せられた。その行が大行として一切衆生の上に仏道成就の願心の用を具現せんとするものこそ、第十八願成就の信心である。しかして、この行信こそ、往相回向の願心の成就として、衆生の自覚の智慧となった如来の悲心である。

往相の回向ととくことは

弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば

生死すなわち涅槃なり（真宗聖典四九二頁）

## 二 二 一回向との値遇

願心の因果は、我らの迷情の因果に応じつつ、因果を超えた一如なる存在の本来性へ還歸せしめんとするための道理である。本願は、従果向因と呼ばれるように、我らの因果の次第をいわば逆行する。我らが迷妄の彼岸に求めんとする滅度を、一如みずからの側から、内に願をもって発起し、外に行として表現して、願行具足の功德の名のりにおいて、如実に滅度を必定せしめんとする。永劫不変にして因果を勝過せる一如宝海が、諸仏平等の証誠をえて無限なる光明を具体的なる名に限定する。果より因へ向かわんとする願こそ、一如の願の本質である。従ってこれが『大經』に説く本願の第一義であるべきであろう。

しかしながら、一如よりの願とは、苦悩の衆生に破闇満願なる功德を与えんがために発起せるものである。苦悩の衆生を捨てずして、安樂國に往生せしめんとする願心が、往相の回向として、内に行・信・証の課題を展開する。従って、衆生が往相の回向に値うとは、行信証をうることである。そのとき、教は行信を獲得せしめるに当って、内なる聞思の内実を与えるための言葉である。言葉となった本願である。本願の言葉によって、仏願の生起本末の意義を聞法思惟して、本願自身の因果としての行信証を信受奉行することができるのである。衆生に法界を回施せんがために、行信証を願として展開して、衆生を引導するものは、言葉に表現せんとする本願そのものを、聞法思惟してきた仏道の伝統である。本願を証誠し、衆生を發遣する仕事は、本願を信受せし求道者の伝統である。教から生まれ教を証しするものこそ、本願が生産する諸仏の伝統である。教が諸仏の教証であることによって、果上の法界を等流して来る清淨願心が、迷倒苦悶の人間関心を破って、苦悩の衆生心中に呼びかける力をもつ。その用が、破闇満願の現実的な作用であることにおいて、「往相の回向について教行信証あり」といわれるように、教は往相の願心が衆生心に接する切先であろう。

されど、教法との値遇は、果上の光明を仰ぐ意欲に与えられるもののみではない。光明を生み出し、諸仏を現前せしめる仏々相念の法界は、確かに仏道の先驗原理に相違ない。しかし、その光明界が単に果上の智慧に止まるかぎり、理念的言葉を生むことはできても、生ける仏法を荷負するような求道的人間存在を生産することはできない。法性のみやこを人類の故郷として相続せしめんがために、仏々相念の大寂靜は、願海を開示して、法蔵菩薩を誕生せしめた。その法蔵願心は、十方衆生の根本的要求たらんとするかぎりにおいて、苦悩の有情の内に呼びかける往相回向の名のりである。しかして、その内なる要求を育て勸めるものは、教法を語りかける諸仏の伝統である。嚴密にいえば、諸仏の伝統を荷負して、衆生同体の苦海を歩む還相回向の願心こそが、迷妄の衆生の因果の中に、それを破る因を積習することができる。諸仏の伝統を現に証明しうるものは、菩薩たる因位の願心である。果上の光を因位の求道心の位において明示するところに、還相の願心が普賢行の形を取る意味がある。回向が還相を有するのは、本願の現成以外に仏法の事實は興起しえないからである。本願成就の信心のみが、人間の上に成仏道を明証しうる。したがって、普賢行を現成していくものは、願成就の信心を相続する聞法者の伝統の外にはない。法蔵願心の実りとしての教法との値遇は、人間の自己の根源性との値遇にある。往相の願心には、教の言葉との値遇がある。還相の願心には、その言葉に生きる人間存在そのものとの値遇があるのではないか。教法を生命とし、聞法を食事とするような願心を荷う主体との値遇こそ、法蔵願心が還相回向を誓う意味なのではないか。

還相は回向の相として、果から因への方向性を特質とする。形なき法界より、形ある宿業生活への意欲である。たとえば我らが、祖師親鸞を憶念するとき、還相回向の具体的姿を感じしうるのは、本願の理証を疑惑して止まぬ罪業の身にも、確かに法蔵願心に感動しその願心に乗托して生きた現実存在があることを知らしめられるからである。往相の回向も、我らの感覺的生活において即自的に自証しうるものではない。行信は不可思議なる願力の表現として、我らの理知分別の闇を破って、始めて獲得しうる涅槃の真因である。まして還相の回向は、我らの意識上の行為や努

力としての普賢行の成立をいうものではない。往相も還相も、本願力としてのみ成立しうる現行である。我らの身心の意識生活を超えて、我らの存在にたまわる願力の表現の意味である。その還相回向との値遇とは、特に因位求道者として凡愚なる我らに先達する菩薩行の行者との値遇なのではないか。それはすなわち菩薩行に感動する因位願心の根拠の表現なのではないか。

曾我量深先生は、「還相の教証、往相の心証」という。教法との値遇を可能にする根拠は、曠劫来流転の苦惱そのものの意味の中に、苦惱を破るようなものがなければならぬ。闇の中に闇を破る光の因位がなければならぬ。しかし我らの内在的要求、すなわち因から果への迷妄分別の要求には、それ自身を破るべき力を見いだせない。内に往相の因をたまわり、外に発遣の教言を与えられ、内外よりの因縁の喚起をえて、微かなる願心の要求に耳を傾けんとすることができるのである。されば、往相の回向を成就せしめる根源に、還相回向の願心がある。往相回向に値いる根底に、還相回向との値遇がある。回向の二相とは、願心成就の生活にたまわる二つの要素である。

教は単に外なる教として聞かんとすれば、知識的要求や理性的探求心の対象として、世俗的言語に墮する。常に世語を突破して超世の悲願の用を回復せんがためには、厳肅なる人生の苦難を生き抜く求道者の魂となり、三毒を病む聞法者の悲喜の血涙とならねばならぬ。単なる美しき果上の光明界を象る言葉ではなく、闇の中に自らを焼く法灯とならねばならぬ。「苦惱の一切衆生を觀察」せんとの大悲心は、必至滅度の至極たる一如宝海より発起しながら、かぎりなく闇に身を沈めて悔いなき本願の永劫修行の用きなのである。

### 三 往相信心の内因外縁

往相の願心を成就せんがために、本願の教相が教行証の体系を具備するといえ、正に往生浄土を確信する主体としての正因は、信心そのものである。心をして人間の眞の主体となるべき智慧とならしむるものが信心である。信心

にとつて、教は心をして浄土への願生の方向へと発遣する外縁であり、行とはそれをより所とし、それを内容として成立すべき往相の業因の所縁である。証は、信心の極限概念としての極果である。涅槃の種子であり、涅槃を必定する真因は信心である。信心は実難獲であるが、その信を成就すれば「無上妙果は成じ難きにあらず」といわれる。すなわち、信心を獲得することこそ、往相回向を表現する一如願心の最大課題である。そのとき仏法を語る一切の言葉や概念は、あるいは信心を発遣し、あるいは信心の内包を開示するものとなる。真の主体にとつて、一切は外縁となる。しかれば、真の主体建立の願こそ、往相回向として表現する願心の中心なるものであるといえよう。

その真の主体たるべき心を、覆蔽し繫縛している障障がある。その障障たるものの根源が自我の執心である。自己を我として愛執し、またその自己を他と比較して、傲ったり卑下したりして、存在自体の尊さとかたじけなさを忘失している。そういう繫縛せられたる状態から真の主体を回復せんとする意欲が、宗教的要求である。その意欲を「願往生心」として教示するのが、浄土の教言である。一如より発起する如来の願心は、定散心の果報として、三有の内の喜樂を求める衆生心を手がかりとして、安樂国土を莊嚴する。国土として莊嚴せられたる世界は、一如の願心が衆生心の相分（対象）を通して、要求それ自体の内観的自己批判を勧励する。願心の報酬として莊嚴せられたる光明界は、純粹無漏なる無色無形の願心を象徴する。有漏雜染の意欲の延長上に、自我の執心を批判することなく、安逸休息の平穩な満足を夢みる凡愚にとつて、無漏の願心のごときは、想像することすらできない。願往生心とは、三界に内在的なる苦海輪回の衆生に、「後生の一大事」を呼びかける言葉である。勝過三界道は、あらゆる我らの意識生活を突破せる領域を教示する。願生心の相分が、願生を発してくる現実というものの有限たることを、そして無限なる光明界は意識を超越せるものなることを、教示するのである。曇鸞大師が「畢竟成仏の道路、無上の方便」といわれたように、莊嚴は三有的善美の極致のごとく象られるも、その因位願心にあつては、十方衆生をして仏道を成ぜしめんがための、一如なる願心自身の自己限定の方便行なのである。

衆生の苦惱海中より發起する願生心と、如来が苦惱の衆生を悲愍して呼びかけたもう欲生心との次元の差異は、人間経験の側から表現しうるとすればそれは限界概念といふべきであらう。「畢竟成仏の道路」といわれるように、成仏道とは畢竟として、恒久に歩んで止まない願の上に確認せらるべきである。その課題の前には、永遠に超えることのできない深淵が存するのである。それだからこそ、大悲願心が「永劫修行」の休息なき実践を行するのである。衆生の諸の小善根への執心のあるかぎり、三界を超過せる道を相分としては識知しえないものが我らの願生心である。これが願生心の根本問題である。

そこに如来願心は、往相信心の内面を三相に展開されたのではなからうか。本願自身の表現する行を名義たる所縁として衆生に与えたにもかかわらず、衆生の主体自身は、三界内の経験の繫縛を脱する機縁を見いだしたい。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして眞実の心なし。ここをもって如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもつて、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもって、諸有の一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。(真宗聖典二二五頁)

この親鸞の三一問答至心釈の言葉は、永久に苦悩を得脱すべき因を建立しえぬ群生海において、如来願心を眞実に信ずることができているのは、無始以来の虚偽諂曲の歴史と共に、永劫の菩薩行を歩む眞実心が衆生に回向せられてあることよってであるを示している。眞実なき衆生の虚妄の意識に、眞実心が發起することは、如来自身の眞実の兆載永劫の歩みの至す所である。その至心は「至徳の尊号をその体とする」という。尊号を所依の体とし、その体に依つて生じて、その眞実功徳を内にたくわえるがゆえに、心そのものが眞実である。

信心にとって名号は外縁である。光号の因縁で明らかかなように、名号を信ずる心にとって、名号は所縁であり外縁



である。その外縁が、しかしそれを所縁とする能因の内に、その功德を移さずは止まぬというところに、永劫修行がかかるのであろう。不可称不可説不可思議の名号の功德の一切を、顛倒せる群生海の心に投射せんがために、相容れる可能性のない迷闇の壁を破って、無窮の時をかけた光明の照射がある。虚偽と不実にしか感応することのない心に、清浄と真実を感受せしめることは不可能である。その不可能を絶対なる超越的力をもって可能とせんとする願心を、本願力回向という。不虛作なる本願力に全面降伏するような心は、虚偽諂曲の心の破れとして、我が計度の心の坐折として、我が身心への値遇として恵まれたものである。それが我執の自力の闇を破って明るみとなった我が主体である。真の主体が回向として我の上に発起する根拠は、我が闇の中にはない。その闇の中に静かに時をかけて修行し続けていた本願力自身の用らきというほかない。闇から光へ方向を回向するものは、往相として恵まんとする本願の力である。

しかし、光が光になるべく闇の中に闇自身となって沈黙する永劫修行の主体は、いわば本願の還相の意欲である。真の宗教的要求は、闇黒世裡の生活そのものに、人間成就の光明海を見いださんとするような意欲であろう。闇を逃れんとして発起する個我的逃避的要求の根源には、現世の三界内在的な生活には、決して充足することができない実存的要求がある。その要求が至盛なる要求として目覚める可能性は、本願の歴史との値遇にある。顯然として光明海に浮びえた往生人の教示せる言葉との値遇にある。しかし、その言葉に感応する内因を探れば、名号に一切の功德を表現せし願心がある。値遇しうる内因は、願心自身の積習せし見えざる根底であるといえまい。

本願の還相的意欲が、信心の内面に名号を体とする真実の相を至心として表現する。往相の信心が外縁たる行を信受しうるのは、正に本願自身の還相の回向に由る。至心は信心の三相（果相・自相・因相）において、果相である。曾我先生はいう。今現在成仏の阿弥陀の名を体として、その功德に如実に相応するという課題は、正に本願自らの永劫修行の現行によって成立する。群萌の闇の過去を貫通せる還相の普賢行によってのみ、衆生の上に名義相応の信が

具現しうるのである。

#### 四 諸仏の発遣と諸仏称揚の大行

法蔵願心の還相意欲は、深く群生海の心底に身を投じたる宗教的願心である。沈迷の群生海に真の宗教的解放を恵まんとする意欲である。この意欲を内因の底にたくわえることをえて、往相の教言を聞思して、淨法界等流の言教として、それに響く心が生ずる。往相として発遣する法界等流の教言は、諸仏如来の光明海中よりの讚嘆行である。また迷妄の闇の顛倒たるを指摘する破邪の言葉である。しかし、諸仏は八万四千の法門を開示するとき、もろもろの功德相を示しつつ、平等法身としての根源を称揚する。諸仏が諸仏自身の功德に執するかぎり、自供養心を超えられぬ。有限の光明に止まるかぎり、十方衆生を平等に発遣すべき無碍の光明となることはできぬ。諸仏の存在の意味は、真に仏事を興起せしめて、苦悩の群生海を発遣するにある。真に諸仏の根源たる平等法身を揚言せんとすれば、個々の光を超越したる無限定にして無尽蔵なる形なき無相の智恵光の前に、己れの光を喜捨して、かの無量無辺光を讚嘆せねばならない。

仏々相念の三昧海より、阿弥陀の御名の咨嗟を本願として選び取つたる五劫思惟とは、諸仏が諸仏としてこの歴史的使命を見いだすべき思惟である。それは十方群生海に呼びかけて、発遣の仕事を成就せんがための思惟である。そもそも仏法が現前することは、三世諸仏の平等法身との呼応において、仏々相念が現成することである。仏々相念を現成せしめる智恵を、迷倒せる衆生に開示せんとする言葉が、如来如実の教言である。されば、衆生をして仏事に参画せしめんとする願いは、本願の還相の意欲の吟味を通して、諸仏の発遣の言葉となる。諸仏が各々自己の功德を執して、衆生の有限的欲願に応ずるとき、諸仏は別解別行人らを督励して、自力執心を徹底せしめる求道心の先達となる。しかし、諸仏がその本性としての一如平等の願海に帰入するとき、諸仏は真に仏法を継承し仏事を興隆する歴史

的証人となつて、清淨無碍なる無量寿無量光を称讚して止まない。

有形の光量を勝破し、有限の功德の光を消失せしめる純粹無漏の智慧光は、外に帰命尺十方無碍光如来なる名を止め、十方衆生の心想中に、その名の照射を受容すべき因を宿す。時機純熟して開發したる如来回施の眞実心は、信鏡に映じたる外縁としての名号の功德を、そのまま内にたまわるのである。しかして、その眞実心となるべき願心は、内外に仏法現成の事実を相続せんとして、第十七願成就の行を發起する。諸仏称名の願は、諸仏が本来の諸仏の仕事に帰るべき行為である。それは同時に、十方衆生に呼びかけて仏事に参画せしめんがための行為である。勸遣の両用をもつた行事である。しかしながら、願自身が成就する時剋の極みにおいては、十方衆生との呼びかけを、我一人がためと聞きとつた単独の旅人が、仏法興隆の独尊子となるのである。仏願に信順して無碍光を称揚する行に参画するところに、本願自身の現起力によって、諸仏の仏事に加入せしめられるのではないか。仏願に呼ばれたる十方衆生は、本願の用に乗ずる人となる時、十方諸仏として仏願を証明する存在となるのである。もちろん、これは衆生の自意識上に諸仏としての有形の光明を現成することをいわんとするのではない。諸仏が、己れの光明を没して悔いなき無量光の発見によってこそ、諸仏は平等なる仏々相念の仏事に入りうるのである。十方衆生は、無限なる一如の願心の回向によって、内に至心を獲得し、外に名号を与えられて、この如実相應の仏事を証明する人とされる。資格なくして、諸仏の仕事を与えられる。聞名の仏法は、本願成就の仏道として、凡夫がこの教言に値遇するところに、諸仏の仏事が相続することを誓っている。凡夫と仏とは、求道の因果として、相對峙する存在領域にあるものであるが、本願成就の因果において、大行の現成する場において、正に仏凡一体といわるべき意味を成就しうるのではないか。大行を現成している主体とは、仏々相念の事実において、三世無量の諸仏である。しかしその仏事が本願成就の事実であるためには、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつ心」の自らなる発表として、称名憶念が現行する場、すなわち、撰取の心光に目覚めたる独尊子の上にあらねばならぬ。

仏願の現行は、内に信の一念として、外に行の一念として、闇の時剋を切り開いて、破闇満願の事実を現成する。その本願成就の事実の上に、諸仏の仕事が仰がれるのである。至心の体となった尊号とは、仏事與成たる願行具足の一念の体であり、十方衆生をして十方諸仏の位に即位せしめる方法である。「念仏もうざば仏になる」とは、本願の因果において、本願に感動する衆生に本願を証誠する歴史の意味を与えることの謂ではないか。十方衆生の解放を我が志願とする真の宗教精神の名のりは、その願に信順する衆生をして、法藏願心の証誠者となさしめずは止まない。

我ら凡夫は、もとより諸仏となるべき個人的善根功德や個別的光明の資格をもって、諸仏の位を得んとするものではない。むしろ、諸仏の悲願に漏れ、諸仏の学びに落第したる罪業深重の我らである。しかるを、十方群生海をして法性常楽の大会衆とせんとする無量無辺なる願心は、資格に漏れ、道に反逆せる我らを撰して、仏法紹隆の仕事を与えずは止まない。諸仏称名とは、単に我らの外なる親鸞・法然等の諸仏善知識の合唱の声なのではない。諸仏の発遣には、確かに、還相回向の願心を証誠する諸仏菩薩の影像の力がある。その諸仏の発遣の根本意志は、衆生をして仏法を求めしめ、さらには仏事を為さしめるところにある。それは、諸仏をも超えて、諸仏平等に一如に帰ることをうる無限なる光明の智慧に依るほかはない。その無限の願心が誓う諸仏称名の行は、「衆生の行」となって、衆生の上に破闇満願の仏事を現前せしめる大行である。その事実を荷う主体には、罪業の諸相を超えて、諸仏の位に相当する存在の意味を与えんとするのではなからうか。我らは正に貧者の一灯として、業苦の身のままに、ただ本願に信順する以外にない。自ら愚痴の凡夫たることを抜け出す可能性は皆無である。しかも「觀彼如来本願力 凡愚遇無空過者」(『入出二門偈』)であって、願力無窮と信知して、本願に乗托する生活のところに、自己の意識を超えて、諸仏平等の法海に適う意味を付与せられる。意識しうる自己は、自己の存在の一部分にすぎぬ。反省できる自己は自己の存在の表相にすぎぬ。その意味では、罪業の自覚というも、自己の意識上にあつては、真に徹到することなどはないのである。下手な反省的卑下的自己意識の立場に立つて、本願力が讃揚している存在の意味を貶しめてはなるまい。大行に

たまわる存在の意味において、還相回向は、諸仏の發遣の用を我らの煩惱生活の中に恵まんとする。分別意識を超えて、我らの念仏生活の上に「不断煩惱得涅槃」の事実を、明証せずんば止まぬのであろう。

## 五 信心が獲得する正定聚

法性常樂を単なる穢土の彼岸に理想化するのではなく、凡夫の妄想顛倒の本来的存在のあり方として、それを回復せしめんとする願心は、宗教的要求の純粹なる自覚課程を通して、法性を未来に確信する現在の因位を開示する。

「眞実信」という心理作用が衆生の心の上に発起するとき、その全存在はあたかも淨玻瓈鏡に写されたる三世の業障を見るがごとく、一点の曇りもなく、曠劫の無明の歴史と、煩惱業と未来永劫の苦の身命とを信知せしめられる。

しかして、その信そのものが、如来の疑蓋無雜の智慧なることを知らしめられる。信が相応せる心は、身心が罪業の果報たることを徹到して自覚する。その心が至心としてたまわる如来回向の心であると知らしめられるとともに、その心によって、この身は未来永劫に諸有を流転する業報の身たるを深信する。かくして、この諸有中に貪瞋煩惱をもつて生死する身において、如来の至心を体として、報土必定の真因を発見することをうる。

必定とは、第十一願が誓う必至滅度を、本願力の因果として確信するところに感得せられる必然性である。仏性未來と教えるのは、衆生の在纏の位を判明にするためである。しかし、一切衆生悉有仏性という大悲の視点、換言すれば一如法性より起る願心の表現として受けとめれば、この未來とは異時の因果の不確定性をいうのではなく、因位願心の本来性回復への必然性の積極的表現となる。どこまでも愛欲名利を超脱しえない凡愚の自覚を徹底して、しかもその全存在が如来掌中にあることの謝念の表現となる。

信心が単に特殊なる心理状態として求められるとき、すなわち統一して散乱せざる神秘的直観とか、純粹無垢なる善行の意志とか、無我無中なる危機脱出への希求とかというようなとき、そういう求め方には、その果は自性唯心と

いわれる自己満足の独善的心境となろう。それは日常性に塵埃のごとく浮遊して、迷い多く疑惑深き迷悶者の意識からすれば、魅力的な特殊状態に相違ない。しかし、煩惱熾盛、罪惡深重なる生活に突き帰されるとき、美的心理や神秘体験などは微塵に碎かれて、元の木阿弥なる凡愚が現前する。「不動なること大山のごとし」とたとえられるような必然性は、かくのごとき特殊心理には与えられまい。冥想裡に感ずる静けさは、動転する日常意識中には、決して涅槃の必定を確保することはできない。

必定とは、因位の願心が内に永劫の闇を貫く金剛の志を確認するところに成立する。仏性未来に安住しつつ、未来なる仏性を先験して、仏性を光明なる智慧として確信するまで止まざる志願こそ「欲生我国」と呼びかける如来の勅命である。

我ら凡愚の素朴なる厭忻の情は、貪欲瞋恚の情を映して、真実なる一如法性への願とは成り難い。しかるに苦惱の群生海を矜哀する大悲心は、衆生貪瞋煩惱中に発起する願往生心を、一如へのわずか四五寸の白道として信賴し、それを勸励し純化する。そのために、欲生心に機の自覚課程を与えて、三願を展開する。我らに頭わに宗教的要求として意識せられるものは、定散心の希求であり、そのかぎり、未だ真の必定を確信することはできぬ。

親鸞は欲生心の釈の中に、いわゆる抑正文といわれる「唯除五逆誹謗正法」の語を押えている。欲生の心が衆生の意識生活上の内容としての願生心に止まるかぎり、自己存在の即自的肯定（我執）と、自己の理念の絶対肯定（法執）とを含むものである。欲生心が真に純粹なる一如の願心たるためには、絶対否定としての「唯除」の門をくぐらねばならぬ。欲生とは、どこまでも超越的本願力の勅命であって、自己の意識上に内在的に経験する願生の心ではない。内在的意欲（曇鸞のいわゆる外楽・内楽）を勝過するような意欲とは、我らには如来の回向として与えられるような意欲である。それは、如来願心の往還二回向として、往くことがそのまま還ることとなるような、往還自在の意欲であろう。真に浄土の不虚作の願力に値遇するとき、仏土を求める心が転じて、仏なき世界にあることを恐れぬような

願心を与えられるのである。欲生心の成就とは、強いアイデアへの意欲として、往生浄土の心が起こることをいうのではない。むしろ、往生の業事は如来願心に帰托して、正定聚不退の信をうることである。欲生心の成就とは、金剛心の獲得である。金剛心とは、無漏の心である。分別もて雑毒を清浄にする意欲ではない。雑毒雑心を突破して生じたる本願力回向の心である。その欲生の意欲が象る生活感情は、一如の風光を具象化して、真実報土を莊嚴する。光明界への希求としての欲生心は、光明界を必定し、光明界を先験することをえて、往還二回向にたまわる心となる。このことによって、我らは凡夫の生死を尽くしながら、信心において、本来は如来浄土の功德たる正定聚不退の位をたまわる。それはもとより、我らの意識生活上の善根功德や功利価値によって得られたものではない。罪業深重の我らには、むしろ地獄こそが必然の住居である。しかし、かくのごとき垢業の凡愚を根源より浄化せずんば止まぬ悲心が、我らを超えて我らの内に、永劫修行を尽くして如来への信順を可能ならしめる。

仏性未来は、如来願心の中の「一切衆生悉有仏性」の自覚によって、純粹未来を確信せる不動の正定の位である。しかも、その心が同時に、大行を現ぜしめる場を開くところに、諸仏の大道を明証する存在たらしめられる。弥陀の本願は、諸仏によってのみ仏法成就の方法を具体化できるからである。三世諸仏の証誠なくんば、本願の仏法は抽象理念に墮する。忍終不悔なる願心は、人間的感情や理念的希求に訴えながらも、それを根源から批判して、真に衆生の苦悩を荷負する一如願心を証誠するような存在たらしめんとする。往還回向をたまわって、その回向を自己の主体の内容とするような欲生心こそ、浄土と穢土との二つの世界を、我が心身の同時因果の場所とすることができ。そこに人間の個我的執心が止むことなく批判せられる生活が成り立ち、同時に罪業の存在が大いなる功德を明証する意味を与えられるのである。

浄土真宗は、往還二回向との値遇によって成立する。ともすれば、往相的願心のみの本意があるごとく教示せられるが、その根源には、深く一如より還相する願心があることを、改めて確認しなければならないのではないか。その

還相は、未来の果としての作用を約束するというごときものでもなく、また決して自己意識上の社会的関心などではない。如来願心との値遇の内に用らいている願力の意味である。如来回向の意味である。浄土の功德が与える現実的意味である。それはすなわち、無限の願心に帰托するところに感受せられてくる我ら無善雑毒の存在の意味ともなるのではなからうか。